

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごへんじ

兵衛志殿御返事

しんざんげんとう こと

(深山嚴冬の事)

新版
1494
〜
1496

ひょうえのさかんどのごへんじ しんざんげんとう こと

兵衛志殿御返事（深山厳冬の事）

こうあんがんねん

弘安元年（'78）

11月29日

57歳

池上宗長

がつ ちち

さい いけがみむねなが

ぜにろつかんもん

うちいつかん

じろう

ぶん

しろあつわた

こそでいちりよう

銭六貫文（内一貫、次郎よりの分）、白厚綿の小袖一領。

しき

たから

さんぼう

くよう

たも

四季にわたりて財を三宝に供養し給う、いずれもいずれ

くどく

とき

したが

しやうれつ

せんじん

も功德にならざるはなし。ただし、時に随つて勝劣・浅深

分

そうろう

飢

ひと

ころも

与

わかれて候。うえたる人には、衣をあたえたるよりも、

じき

そうろう

少

くどく

勝

凍

ひと

食をあたえて候は、いますこし功德まさる。こごえたる人

じき

そうろう

ころも

勝

はるなつ

には、食をあたえて候よりも、衣はまたまさる。春夏に

こそで

そうろう

あきふゆ

くどく

小袖をあたえて候よりも、秋冬にあたえぬれば、また功德

いちばい

いっさい 知

一倍なり。これをもつて一切はしりぬべし。

しき ろん

にちがつ

糾

ただし、このことにおいては、四季を論ぜず、日月をただ

銭

米

帷

絹

小袖

ひびつきづき

隙

さず、ぜに・こめ・かたびら・きぬこそで、日々々にひま

れい

頻

婆

姿

羅

王

きようしゆしやくそん

ひびひび

なし。例せば、びんばしやおうの教主釈尊に日々々に

ごひやくりよう

しゃ

送

あいくだいおう

じゆうおく

さきん

けいずまじ

五百輛の車をおくり、阿育大王の十億の沙金を鶏頭摩寺

施

だいしよう 異

こころざし

彼

にせせしがごとし。大小ことなれども、志はかれにも

勝

すぐれたり。

うえ

ことし

しさいそうろう

冬

もう

冬

冬

その上、今年は子細候。ふゆと申すふゆ、いずれのふゆ

寒

夏

もう

夏

夏

暑

かさむからざる。なつと申すなつ、またいずれのなつかあつ

ことし よこく

そうろう

からざる。ただし今年は、余国はいかんが候らん、この

波木井 ほう 過

寒 そうろう

翁 問

はきいは法にすぎてかんじ候。ふるきおきなどもにとい

そうら はちじゆう くじゆう いっぴやく もの ものがた そうろう

候えば、八十・九十・一百になる者の物語り候は、す

古 寒 そうら

庵 室

べて、いにしえこれほどさむきこと候わず。このあんどち

しほう やま ほか じつちようにじゆつちよう ひと 通

そうら

より四方の山の外、十丁二十丁は、人かようこと候わね

知 そうら 近 辺 いっちようにちよう

雪 いちじよう

ばしり候わず、きんぺん一丁二丁のほどは、ゆき一丈

にじようごしやくとう 閏 じゆうがつさんじゆうにち

少 降

二丈五尺等なり。このうるう十月三十日、ゆきすこしふり

そうら 消 そうら つき じゆういちにち 辰

て候いしが、やがてきえ候いぬ。この月の十一日たつの

とき じゆうしにち おおゆきふ そうら りようさんにち 隔

時より十四日まで、大雪下つて候いしに、両三日へだて

てすこし雨ふりて、ゆきかたくなること金剛のごとし。い

消

昼

夜

寒

冷

そうろう

まにきゆることなし。ひるもよるも、さむくつめたく候こ

ほう

過

そうろう

酒

凍

いし

油

と、法にすぎて候。さけはこおりて石のごとし。あぶらは

こがね

似

鍋

釜

しょうすい

凍

割

寒

金ににたり。なべ・かまに小水あればこおりてわれ、かん

重

そうら

着物

薄

じき 乏

いよいよかさなり候えば、きものうすく、食ともしくして、

差

出

者

さしいずるものもなし。

ぼう

半

作

風

雪

溜

敷

物

坊ははんさくにて、かぜゆきたまらず、しきものはなし。

き

差

出

者

ひ

焚

古

垢

付

木はさしいずるものもなければ火もたかず。ふるきあかづ

そうろう

小

袖

ひと

着

きなんどして候こそで一つなんどきたるものは、その身

み

色 ぐれん だいぐれん

波々 だい婆々 じごく

のいろ紅蓮・大紅蓮のごとし。こえは、はは・大ばば地獄に

異 寒 切 裂 ひとし 限

ことならず。手足かんで、きれ、さけ、人死ぬことかぎり

ぞく 髭 櫻 珞 懸 鼻

なし。俗のひげをみれば、ようらくをかけたなり。僧のはなを

鈴 貫 せうろう

みれば、すずをつらぬきかけて候。

せうら せうろう こそ じゆうにがつ さんじゆうにち

かかるふしぎ候わず候に、去年の十二月の三十日よ

腹 気 せうら 是るなつ 止 秋

りはらのけの候いしが、春夏やむことなし。あきすぎて

じゆうがつ だいじ せうら へいゆ

十月のころ大事になりて候いしが、すこし平愈つかまつ

せうら 起 せうら きようだいににん

りて候えども、ややもすればおこり候に、兄弟二人の

こそで 綿 しじゆうりよう 着 せうら 夏 帷

ふたつの小袖、わた四十両をきて候が、なつのかたびら

軽

そうろう

綿

薄

布

のようにかろく候ぞ。ましてわたうすく、ただぬのもの

たま

ふた

小袖

ばかりのもの、おもいやらせ給え。この二つのこそでなく

ことし

凍

死

そうら

ば、今年はごごえしに候いなん。

うえ

きようだい

もう

うこんのじよう

もう

じき

相次

その上、兄弟と申し、右近尉のことと申し、食もあいつ

そうろう

ひと

無

とき

しじゆうにん

有

とき

ろくじゆうにん

いで候。人はなき時は四十人、ある時は六十人、いかに

塞

そうら

ひとびと

兄

しゅつたい

しやてい

せき候えども、これにある人々のあにとて出来し、舎弟と

差

出

そうら

てさしいで、しきい候いぬれば、かかはやさにな、いかにと

もう

こころ

庵

室

結

こぼうし

も申しえず。心には「しずかにあんじちむすびて、小法師

わ

み

おんきよう

ぞん

そうろう

と我が身ばかり御経よみまいらせん」とこそ存じて候に、

煩

そらら

年 明

そらら

かかるわずらわしきこと候わず。また、としあけ候わば、

逃

ぞん

そらら

煩

いづくへもにげんと存じ候ぞ。かかるわずらわしきこと

そらら

もう

そらら

候わず。またまた申すべく候。

右衛門

たいふのさかん

殿

おんこと

父

おんなか

なによりもえもんの大夫志ととのとの御事、ちちの御中

もう

かみ

覚

もう

めん

もう

と申し、上のおぼえと申し、面にあらずば申しつくしがた

きようきようきんげん

し。恐々謹言。

じゆういちがつにじゆうくにち

にちれん

かおう

十一月二十九日

日蓮

花押

ひようえのさかんだのごへんじ

兵衛志殿御返事